

国際シンポジウム 南蛮史料研究の新地平

主催：早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」

共催：早稲田大学スーパーグローバル大学創成支援

早稲田大学ラテンアメリカ研究所

早稲田大学多元文化学会

早稲田大学文化構想学部多元文化論系

早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「グローバル化社会における多元文化の構築」

科学研究費補助金基盤研究(C)「ルイスフロイスによる日本情報に関する総合的研究」

日時：2020年1月11日（土）9：50 - 18：00

場所：早稲田大学戸山キャンパス 33号館 3階第1会議室

総合司会：伊川健二（早稲田大学文学学術院教授）

報告：セッション1：イエズス会の日本布教

①パウラ・オジョス・ハットリ（ブエノスアイレス大学・助教授）

「驚異と野蛮のあいだ—16世紀における日本人の性格に関するイエズス会士たちの描写」

②岡本真（東京大学・助教）

「受洗以前の小西氏に関する一試論」

③ジョゼ・ミゲル・ピント・ドス・サントス（ノヴァ大学リスボン・研究員）

「信仰の広がり—1549～1614年の日本でのイエズス会布教活動における教理口授法、教義と論争」

④チャールズ・ジュリウス・ボルジェス（ロヨラ大学メリーランド・准教授）

「16～17世紀のイエズス会士たちの記述における日本観察」

セッション2：美術への結晶

①タイモン・スクリーチ（ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院・教授）

「ヨーロッパ絵画の主題としての日本でのキリスト教宣教師たち」

②川田玲子（滋賀大学・非常勤講師）

「日本で殉教（1597年）したメキシコ人フェリーペ・デ・ヘスス」

③児嶋由枝（早稲田大学・教授）

「日本のイエズス会画派と東アジアの宣教美術—マカオ、マニラ、長崎」

④成澤勝嗣（早稲田大学・教授）

「南蛮屏風の変遷」

セッション3：相互認識を語る

①谷口智子（愛知県立大学・教授）

「グレゴリオ・デ・セスペデスと文禄の役」

②伊川健二（早稲田大学・教授）

「天正遣欧使節の史料学」

③滝澤修身（長崎純心大学・教授）

「天正少年使節」—スペイン史料からの再考—

④根占献一（学習院女子大学・教授）

「キリシタン時代の自己認識と他者意識—文化的・思想的資料から—」

2020年1月11日、早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「トランスナショナル社会と日本文化」では、国際シンポジウム「南蛮史料研究の新地平」を開催した。冒頭、川尻秋生文学学術院長より開会の辞があり、また総司会より趣旨説明が行われ、その後、3セッション構成で12報告が行われた。

セッション1は、ジョゼ・ミゲル・ピント・ドス・サントス氏の司会で行われた。パウラ・オジョス・ハットリ報告では、日本で書かれたイエズス会士たちの書簡から、日本の風土や異教徒としての性質を概観した。岡本真報告では、キリシタン大名小西行長として知られる小西氏の受洗以前の状況、なかでも堺商人としての活動・系譜について検討を加えた。ジョゼ・ミゲル・ピント・ドス・サントス報告では、教義を意味する「Catechesis」と「Doctrine」の違いをはじめ、宗論などを通じて信仰が広がる要素について考察した。チャールズ・ジュリウス・ボルジェス報告では、イエズス会日本布教の財源としてインドが機能していたことなどをはじめ、当該期における日本布教情報を独自の観点から論じた。

セッション2は、児島由枝氏の司会で行われた。タイモン・スクリーチ報告では、ヨーロッパ各地に現存する美術のなかで、フランシスコ・ザビエルなどのイエズス会士たちがどのように表現されていたのかについて、豊富な事例を紹介した。川田玲子報告では、日本で殉教したメキシコ人であるフェリーペ・デ・ヘスが列福されたのち、どのように捉えられ崇拜されたのか、精緻な図像分析を通じて、後世の人々によるフェリーペ・デ・ヘス理解を抽出した。児島由枝報告では、東アジアに派遣されたイエズス会士の画家、ジョバンニ・コーラの動向に注目し、マカオ、マニラ、長崎の工房で生産された絵画分析を通じた当該期の宣教活動の実態に迫った。成澤勝嗣報告では、南蛮船の日本到着という画題について、南蛮寺や宣教師、カピタンの描かれ方に注目して、聖から俗へ転換していく変遷を明らかにした。

セッション3は、伊川健二氏の司会で行われた。谷口智子報告では、文禄の役で朝鮮に渡ったスペイン人イエズス会士グレゴリオ・デ・セスペデスの書簡を紹介し、これまで知られてこなかった文禄の役に関する新たな側面を提示した。伊川健二報告では、大量かつ多種にわたる天正遣欧使節の関係史料を分類し、所蔵の傾向を把握することで今後の史料調査を効果的に進めうる可能性が示された。滝澤修身報告では、天正遣欧使節のスペイン国王謁見などに着目し、従来イタリアでの事績に関心が集中する研究史に対して、スペインの応接態勢の重要性が強調された。根占献一報告では、ハビアン・フカンと同時代のイギリスの思想家であるフランシス・ベーコン、彼の秘書でもあったトマス・ホッ

ブスおよび彼らを取り巻く環境との比較をおこなうなかで、ハビアンの特徴を分析した。

3セッションを通算して89名の来場があり、各セッションの最後には、それぞれの報告について報告内容を掘り下げる有益な質疑や提言がなされ、本シンポジウムは盛会のうちに終了した。また、シンポジウム中のコーヒースタンドやシンポジウム後のレセプションでは、報告者と参加者間、また参加者間の活発な交流が行われ、南蛮史料研究のさらなる進展に向けた研究者ネットワーク構築に向けた第一歩を踏み出すことができた。

(記録 伊川健二・赤松秀亮)

シンポジウムの様子

